

2018年5月

留学先決定に至るまでの経緯

2018年度 Funai Overseas Scholarship Recipient

一橋大学大学院経済学研究科博士課程

Department of Economics, New York University 博士課程留学予定

和田健司

① 大学院留学を目指すまでの経緯

私は一国全体の経済活動（マクロ経済活動）と金融市場、特にリスクについて興味を持ち続けてきました。親が株を始めとする資産運用を行い、それに関わる経済のニュースをよく私に話してくれていたことがきっかけだったと思います。したがって、経済学部に入学後は自然にマクロ経済学やファイナンスの授業に興味を持ちました。進路選択を考える学部3年の時には、「とりあえず、マクロ経済と金融市場を分析するような仕事に就きたい」と思うようになっていました。

当然、マクロ経済と資産市場を分析するのは経済学研究者に限ったことでなく、公的・民間の金融機関のエコノミストやクオンツといった職業人も行っていることです。実際、学部3年の時には金融機関のインターンに参加することもしました。しかしながら、分析対象である経済を数学という普遍的な言語でモデル化し、現実の経済を説明しようとし、将来の予測を行おうとする、言うなれば一種の科学的アプローチの方に次第に惹かれていきました。これはあやふやに経済を語る巷のニュースとは極めて対照的で、とても新鮮でした。自分もこのような説得的なアプローチを身につけたいと思い、経済学研究者を目指すことに至りました。

それと同時に、御多分に洩れず、大学院留学を目指すこととなりました。経済学研究の中心地である北米のトップスクールで教育を受け、博士号を取得することが一人前の経済学研究者となるためのグローバルスタンダードだと言われているからです。

しかしながら、留学には日本では経験しない大変さが伴うことも分かっていました。特に、留学には語学という大きなハンデがあります。実際、学部時代に大学の派遣留学でオーストラリアに行った際も、この面で苦労をしました。寮のパーティでゲームをしている時、終わ

るまで訳がわからず、周りを見て勝手にルールを予測する別の「ゲーム」をしていました（それはそれで別の意味で面白かったのですが）。さらに、Group Study の時も、最初の頃は自分の意見をいうどころか、そもそも今は何を議論しているのかもわかりませんでした。場違いなことを言っては笑われると思い、終始黙っていました。そんな中でも、とりあえず、派遣留学を終える頃にはある程度の交友関係を育めるようにはなっていました。しかし、今後学位取得を目指し海外に行けばそれ以上の困難が待ち受けているでしょう。

それでも、なお海外留学をしようと思う理由はやはり、経済学という学問を極める上で北米が最適な環境だと思ったからです。経済学のスターと言われる研究者の多くは北米のトップスクールの教授です。彼らの下で研究をし、博士論文を執筆し、現在の最先端の経済学というツールを身につけ、世界に通用する研究者になりたいという動機が異国の地で頑張ろうという決心を後押ししました。

② 大学院留学に至るまでの準備

経済学での大学院留学の出願にあたって、最低限として、学部・修士の成績、3通以上の推薦状、Writing Sample、英語、GRE、そして志望動機（Statement of Purpose, SoP）を揃える必要があります。以上のものをきちんと揃えるために、修士課程を一旦経てから、大学院への出願をすることに決めました。そして、修士2年の段階で出願を行いました。

Writing Sample は修士論文を提出しました。英文の校正のために大学のアカデミックライティングの授業を履修し、何度も改訂しました。英語に関しては派遣留学のおかげもあり、ゆとりを持って学部時代には TOEFL のスコアを確保することができました。GRE に関しては、まずは Quantitative のセクションで満点を目指すこと、そして Analytical Writing (AW) でもなるべく高いスコアを取ることに努めました。この勉強は昨年8月にはじめました。出願プロセスでの AW の重要性は見解が分かれるところですが、ライティングの能力を伸ばすことを目標に AW の勉強をしました。

SoP に関しては、Essay の形式でなぜ自分が出願先の博士課程に入学するのにふさわしいのか（出願先の大学院にどのようなベネフィットを与えられるのか）を Thesis Statement として、これまでのバックグラウンドを通じてこの主張をサポートしていきました。この SoP は何度も指導教授に校正をしていただきました。特に最初の頃は気負いすぎて別人格が書いたような文章となり、先生からよくダメ出しをいただいていた。出願締め切りギリギリまで悪戦苦闘し、これまでの人生でもっとも書くことが難しいものでした。

次に、出願先の決定ですが、大学の先生と相談させていただき、米、英、加のマクロ経済

学の強い大学をある程度幅広いランクで出願しました。出願前には自分の行きたいと思う大学のみならず、指導教授や海外の大学院に詳しい人のお勧めを聞いて多めに（10校以上）出願先を決定しました。これは合格後に改めて気づいたのですが、Open Houseに行き、現地の学生や教授と話すことで初めてわかることはとても多かったです。出願時の自分にはあまり馴染みのないプログラムでも、実際には優れたものであることが合格後に初めて知ったこともありました。

最後に、いくつかの留学奨学金に応募をし、最終的に船井情報科学振興財団様より去年の11月に内定をいただきました。出願の際の強みとなりますし、経済的にも留学後の資金のやりくりがやりやすくなります。また、大学から Fellowship をもらう場合でも、奨学金があると増額してくれるので、ニューヨークのような物価が高い都市に住む場合はなおさら重要になるかと思います。奨学金の応募も大変な作業でしたが、獲得できた場合の便益が極めて大きいものでした。

③ 出願後から留学先の決定

今年の2月から3月にかけて、ありがたいことに、出願した大学のうち、複数の大学からオファーをいただくことができました。最終的にニューヨーク大学（New York University, NYU）に留学先を決定しました。というのも、ニューヨーク大学は付属のビジネススクール（NYU Stern School of Business）も含めて、世界的なマクロ・金融経済学者（Macroeconomics and Financial Economics）が多数在籍されています。ノーベル賞の受賞者であり、私が四苦八苦して読んでいる「Recursive Macroeconomic Theory」の著者であるトーマス＝サージェント教授も在籍されております。この本で学んだ知識は私の学問的基礎となっています。さらには、ビジネススクールには、同じくノーベル賞受賞者である、ロバート＝エンゲル教授が在籍され、時系列分析の大御所でいらっしゃいます。さらに、Open Houseに参加した際に、学生間の雰囲気がよく、上級生たちが積極的に合格者に話しかけ、NYUの魅力について生き生きと語りかけてくれたことも大きな要因でした。ニューヨークは生活環境として便利に暮らせることも魅力の一つでした。このような学問的・生活面いおける理由でNYUに決めました。

最後に

この留学が実現できたのは、船井情報科学振興財団様からの手厚いサポートがあったからだと思っております。金銭面のサポートだけでなく、定期的に懇親会を開催していただき、他の留学生とのネットワーク形成でも大変お世話になっております。深くお礼を申し上げます。研究を通じて社会に貢献すべく、日々精進して参ります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

